

戦後開拓集落における共同性の現状

－岡山県A開拓地を事例として－

大竹 晴佳*

新見公立短期大学地域福祉学科

(2014年11月19日受理)

戦後開拓で拓かれ営農を確立した集落は、開拓行政終了以降、その共同性をどう変容させ、いかなる現状にあるのだろうか、について岡山県におけるA開拓地を事例として検討した。A開拓地ではまず農業面の動きとして、大根のブランド化に向けた共同選果の試みが行われた。また農業以外の生活面においても、スキー場の共同運営や婦人会、部落活動など様々な動きがあった。このような活発な共同性を支えてきた要因としては、地区運営が平等に行われてきたこと、また地区構成員の世代が画一的であることの2点を指摘することができる。しかし世代交代を経た現在、地区運営の平等性と世代の画一性は、活動の停滞を不可視化するよう機能しているようにも見える。A地区の共同性は今後、地区外との関わりを踏まえて考察する必要がある。(キーワード) 戦後開拓, 集落, 共同性, 地域, 農山村

1. 問題関心

1) 研究目的

本稿の目的は、戦後開拓による入植で拓かれ、現在も中山間地域に存続している一集落を事例として、その共同性の現状について明らかにすることである。戦後開拓で配分された土地は、農業には従来不向きとされてきた条件の悪い土地であったために、いずれの開拓地においても入植当初、開墾は困難を極めた。生活のためのインフラどころか居住施設もなかったために、最初の数年間は開墾を共同で行い、住まいも共同居住とするなど、共同性を非常に高めた状態で凌がなければならなかった。開墾が進んでからも、電気や道路といった生活基盤の整備を共同作業で行う必要があり、入植者達は、営農の確立という目的のもとで共同性を構築してきたのである。

戦後開拓行政は1974年に政策としては終了し、開拓農政は一般農政に移行した。営農を確立し一集落となった開拓集落において、その共同性はどのように変容し、開拓行政終了から40年経った今、いかなる現状にあるのだろうか。本稿では岡山県の県北に位置するA開拓地を事例としてこの問題について検討していく。

2) 先行研究と分析視角

戦後開拓集落で構築されてきた共同性とはどのようなものなのか、そして現在それはどのような現状にあるのだろうかという本稿の問題関心と重なる先行研究として

は、下記2点が挙げられる。

蘭(1988)は満州開拓団を母体とする戦後開拓集落について、満州移民体験にもとづく“きずな”と「共属意識」を共同性の基盤としてもつ「シンボル共有体」という側面を見出した。入会林野などの物的なものを基盤とする共同性ではなく、「主観的意識」を基盤とする共同性が成立する可能性を示唆したのである。また越智(2010)は、戦後開拓集落にとって、送出元である母村との関係が開拓集落の成り立ちを支えるシンボルとなり、集落における地域的な親密関係を維持するように機能していることを見出した。先祖代々という土地へのしがらみをもたない新しい集落が、何を基礎としてそのまとまりを維持し、存続へと向かわせるのかということに関して、文化的なレベルまで降り立った考察をおこなったものといえる。

戦後開拓集落といわゆる既存集落とはそもそもの成り立ちが全く異なる。通常、日本の府県における農村は、世代を超えて連続してきた家から構成される村であり、現在はその存続が課題となっているが、戦後開拓集落については、先祖代々受け継がれてきたという家の存続をめぐる規範がない。では何をもとに共同性を構築し得るのだろうか。上述の2つの先行研究は、その問題に答えようとしたものであった。

一方、農山村における共同性の現状を問うという問題関心は、先祖代々継承されてきた家々から成る府県農村に関する研究の中で、実証的に行われてきている。村のあり方をめぐる研究においてはその共同性の把握は核心

*連絡先：大竹晴佳 新見公立短期大学地域福祉学科 718-8585 新見市西方1263-2

部分ともいえ、分厚い研究蓄積があるが、ここでは共同性の発現の諸相を具体的に把握し、そこから現代における共同性の姿を帰納的に実証されている近年の2つの研究に、その方法を学びたい。

例えば永野(2011)は共同性の特質を明らかにすることを通して、今日のムラ(行政区分としての村とは区別される、実態としてのムラ)の存続を明らかにした。ムラぐるみのまとまりの基盤であった農業が衰退しつつある現在、「今日のムラの共同性は、生産の場としての共同性を大きく後退させ、近隣居住の住民から構成される生活の場としての共同性に縮減しつつある」(p310)としつつも、ムラの共同性は「内外の状況変化に対応して柔軟に変化してきた」のであり、「今日でもなお、独立した平等な家々が、生活の必要や目的に応じて相互に連合し、幾重にも重複して、藩制村に近い範囲に累積している」(p309)ことから、ムラは今日まで続いている、と結論づけている。

また林(2003)によれば、「ムラのありよう」を問うことは、「何よりもその構成員間の共同性のありようを問うこと」(p91)である。林(2003)は共同性を、家結合での共同性(共同性Ⅰ)、ムラでの共同性(共同性Ⅱ)、家を媒介としない個と個の共同性や当地外に展開する親族関係(共同性Ⅲ)と3つのレベルに分けた。そしてこの3つのレベルの共同性が、相互に関連し合う重層的な構造を成していることを明らかにして、次のように述べている。「多元的・重層的な「まとまり」を内包するそれぞれの柔軟な仕組みが維持されていることが明らかになる。その仕組みによって、法・行政との対応を含めた対外的な交渉・調整が行われる一方で、対内的には生活様式の変容に応じて、その「まとまり」の相貌を自在に変化させていくところに、「伝統的地域組織」としての「ムラのありよう」がみとれるのである。」(p105)

以上より第一に、農業の衰退などの環境変化に柔軟に対応して、生活に必要な共同性が再編成されていくか否か、第二に、生活の必要性に応じた様々な共同性が重層的に存在するか否か、という点が、共同性の現状を考察するにあたって重要な視点だといえる。もちろん前述のように、府県において長い歴史を持つ既存の農村と、戦後に形成された歴史の浅い開拓集落とでは、その共同性のあり方に大きな違いがある。その本格的な検討は今後の課題であるが、本稿では既存農村に関する上記先行研究の方法論を援用し、柔軟性と重層性という2つの側面から、戦後開拓地における共同性の現状について考察してみたい。

3) 調査の概要

本稿で用いるデータは、公刊された史資料および、当該地区の入植者が残した手記等の文献の他、現在もA地区に住民票を残している17世帯のうち、実際に居住してい

る9世帯を対象として行った質問紙調査の結果と、2008年以降2013年まで断続的に行ってきた地区内外の住民10名に対する聞き取り調査の結果である。

2. 調査地の概要

以上の問題関心について、本稿ではA開拓地を事例として考察していく。なお、A開拓地の「A」とは地名であり、本稿ではA地区およびA開拓地という書き方を場合に応じて使い分けるが同じ地区を指す。また後述のようにこの地区には以前スキー場があり、Aスキー場と呼ばれていたがこれも同じ地区名が名前となっている。

A地区の概要は以下の通りである。

1) 開拓の概要

A開拓地は、岡山県の県北に位置し、標高は平均で644mほどのところにある土地である。地質は火山灰土で酸性が強く、また、積雪量が多く降雪期間は3か月に及ぶことから、入植当初まで農業にとっては不利な条件の土地だと目されてきた。

開拓地になる以前は、陸軍の演習場であり、演習が行われない時は地元民が牛の放牧を行っていた。地元の子ども達にとっては原っぱのようなところで、遠足に来るような場所でもあった。開拓地となるにあたって、農地となる原野を買収された地元民はいなかったが、山林を買収された家が2・3世帯あった。

開拓用地は全体で136ヘクタールあり、そのうち山林と原野を開墾して66ヘクタールを畑にする計画であった。一人当たりの土地配分面積は、耕地化可能な土地が2.3ヘクタール、宅地用土地が1アール、山林が2ヘクタールと決められ、27名分が用意された。

1946年10月16日、21人の先遣隊が入植して開拓が始まった。1948年に開拓農業協同組合を設立し、「土地配分計画」「開墾計画」「道路計画」「防災林計画」を立案して開拓地の基盤整備が進められた。しかし1949年には離農者が続出し、自給自足がどうにか可能になったのは1951年頃になってようやくのことであった。1951年には電気が導入され、地区をあげて祝賀会が催されている。インタビューの中で、開拓当時嬉しかったこととして口々に挙げられるのが、この電気導入事業のことであった。1952年には開拓神社が建立された。

1960年頃になると、それまで不振開拓地の営農確立支援を旨としていた開拓政策が、営農不振地区の整理解消へと転換する。しかしA地区では酪農や苗木栽培が軌道にのりつつあり、さらに大根の生産量が急速に拡大し始め、農業経営が安定していく時期であったため、これを乗り越え営農確立へと邁進した。1970年にはA地区に墓地が造成された。1971年には開拓行政終了に伴い、開拓

農協を解散し、1972年に農協最後の事業として「開拓の碑」が建立された。

現在のA地区農家の経営規模を見てみると、販売農家8世帯のあいだにはバラつきはあるものの、隣接の既存部落と比較しても経営規模の大きな農家として現在あることがわかる(表1)。

表1 農産物販売規模別経営体数販売農家数

| | 農産物販売なし | 100万円未満 | 100～500万円 | 500～1,000万円 | 1,000万円以上 |
|---------------------|---------|---------|-----------|-------------|-----------|
| A地区の販売農家数8 | 1 | 1 | 2 | 2 | 2 |
| (参考)隣接する既存集落の販売農家数7 | 1 | 6 | — | — | — |

農林業センサス2010年より筆者作成

2) 入植者の残存状況および現在の居住者

表2は、入植当初から現在までの4つの時点におけるA地区の居住者をまとめたものである。1948年までに1～26と番号が振ってある26名が入植した。1972年の農協解散時点で居住があったのは17戸であった。1990年にも2戸の入れ替わりを含めて17戸が居住していたが、現在居住者があるのは、1, 3, 4, 5, 6, 8, 10, 27, 28の9世帯である。また現在の居住者に対する聞き取りの中では、1～16(7, 9を除く)および27, 28, 29の17世帯が、近年まで当地区に暮らしていた家としてなじみ深く語られた。

表2によるまとめから、次の2点を読み取ることができる。第一に、親類縁者で誘い合って入植した者が多く、またそのように入植した世帯の方が現在も残っている。現在居住者がある9戸のうち6戸は出身地が一緒の2戸および4戸であった。また9戸のうち6戸は親戚関係にある2戸と4戸であった。すなわち9戸のうち7戸は出身地が一緒か、もしくは親戚関係にあった。

第二に、現在、居住者がある9戸のうち、7戸が、開拓農協設立時にはすでに入植しており、そのまま跡継ぎが残った世帯である。残り2戸のうち1戸は、上記7戸のうちの1人の兄弟であり、後継入植で現在も居住者がある世帯は1世帯のみである。すなわち、A地区では他の戦後開拓地と同様に、入植以降、離農が相次ぎ様々な入れ替わりがあったが、現在まで居住している者のほとんどは、入植当初のメンバーの後継者であるということがわかった。

3. 農業を基盤とした共同性強化の試み

—大根の共同選果—

以下本稿では、1972年の開拓農協解散後にA地区で見られた共同的な試みを順次見ていく。はじめに、農業を基盤とした共同性を強化する試みといえる大根の共同選果をめぐる動きを取り上げてみたい。

この地区では1960年代から大根を作っており、65年には全員が栽培するようになって大根出荷組合が設立されていたが、1988年に選果場を建てて共同選果を行うようになった。それまでは自分の家で栽培したものを個人で選別して、個人で洗って出荷していたが、それでは数が限られる。また家ごとにサイズが異なるなど、品質が揃わない。共同選果にして作付面積を増やし、品質も揃えて、市場での占有率を高めようということが動機であった。

大根部会とは、農協の一部会であり、選果場も農協の一施設として建設されたようであるが、部会のメンバーのほとんどはA地区の農家であり、他は近隣集落の4・5名が加わっていた。選果場の土地は、A開拓に隣接した地元の人の土地が提供された。共同選果場が稼働していた頃のことを、現在の住民は次のように語った。

「開拓でなにか錢儲けをすることがないか言うて、蒜山は大根でようけ儲けよる言うて、ここもしようやいうところで。個人で選別をして、個人で洗って出しよった。だけどそれじゃだめだいうことで、あそこの土地を買って、共同で洗って、選別して、出荷しよった。地元の人もな、組に入れてくれ言うてじゃったけ入って一緒にしよった。大根部会言うてな。誰でもよかったな、誰でも入れる。苗木部会というのはない。大根部会だけ。この辺で大根つくっている人はみんな入って、部会長がいて、会計がいたりして。共同選果になって。自分のところで抜いて洗ってって言ったらある程度までしか作れないけど、個人で作ったときには多い人が5反くらいなもんで。大根でも連作障害いうものが出てな。いけんから言うてあれんなったんじゃけど。共同になってからは多い人は2町以上つくりよった。自分で洗わんでいいから量が植えられるからね。朝抜いて持っていっただけで、あとは選果場でやってくれるからいいけど、以前みたいに自分で洗って荷造りして言うたら、もう数が限られる。」

選果場ができてから、A地区の経営耕地(畑の面積)は大きく伸びた。(表3および表4参照)しかし共同選果になって出荷数が増えても、各農家の収入はむしろ減ってしまったという。

表2 A開拓地の入植者とその後の居住状況一覧

| 開拓農協組合員名簿 ※1 (26名) 1948年 | | 開拓の碑 ※2 (17名) 1972年 | 地区案内図 ※3 (15世帯) 1990年 | 現居住者 (9世帯) 2013年 | 備考 | |
|--------------------------------|----|---------------------------|-----------------------------|---------------------|--------------|---|
| 1 | 兄弟 | ○ | ○ | ○ | 親戚関係 (B町) | 出身一緒 2世は仕事で他出。2世の妻と3世が残る。 水稲・トマト。 1972年以降に居住開始。トマト。土地は18より譲渡された。 |
| 27 | | ■ | ○ | ○ | | |
| 2 | | ○ | ○ | ■ | 親戚関係 (Y町) | 出身一緒 現在、居住なし。 県内都市部に在住の2世(1世の長女)がたびたび帰省。 満州・シベリア抑留引揚。1世の妻(引揚者)が独居。 満州引揚。トマト。3世はすべて他出。 |
| 3 | | ○ | ○ | ○ | | |
| 4 | | ○ | ○ | ○ | 親戚関係 (I市) | 出身一緒 和牛。 乳牛。 満州引揚。 満州引揚。樹苗・トマト。4世代同居。 |
| 5 | 兄弟 | ○ | ○ | ○ | | |
| 6 | | ○ | ○ | ○ | | |
| 7 | | ■ | ■ | ■ | 親戚関係 (I市) | 出身一緒 満州引揚。 満州引揚。樹苗・トマト。4世代同居。 |
| 8 | | ○ | ○ | ○ | | |
| 9 | | ■ | ■ | ■ | × | |
| 10 | | ○ | ○ | ○ | 親戚関係 (I市) | 出身一緒 岡山県内出身、次or三男、児島湾干拓から移住。現在は1世の妻が独居。 |
| 28 | | ○ | ○ | ○ | | |
| 11 | | ○ | ○ | ■ | 親戚関係 (I市) | 出身一緒 1世の男性で最後に亡くなる(2013年)。B市出身。元近衛兵。現在、1世の妻は近隣の介護施設に入所。B市在住の親類が家を管理。 |
| 12 | | ○ | △ | ■ | | |
| 13 | | ○ | △ | ■ | 親戚関係 (I市) | 出身一緒 開墾後に入植。 開墾後に入植。県外だが近隣の地域出身。 |
| 14 | | ○ | ○ | ■ | | |
| 15 | | ○ | △ | ■ | 親戚関係 (I市) | 出身一緒 関東軍の将校。 苗木栽培の中心人物。 |
| 16 | | ○ | △ | ■ | | |
| 29 | | ■ | ○ | ■ | 親戚関係 (I市) | 出身一緒 大阪万博のために大阪の土地を売って移住。 |
| 17 | | ○ | ■ | ■ | | |
| 18 | | ○ | ■ | ■ | 親戚関係 (I市) | 出身一緒 B市で家屋調査士。土地は27へ譲渡した。 |
| 19 | | ■ | ■ | ■ | | |
| 20 | | ■ | ■ | ■ | 親戚関係 (I市) | 出身一緒 県内都市部に在住。開拓地近隣の集落に毎年餅を注文している。 |
| 21 | | ■ | ■ | ■ | | |
| 22 | | ■ | ■ | ■ | 親戚関係 (I市) | 出身一緒 兄弟で入植。兄はすぐに離農。弟はしばらくいた後、県外だが近隣の都市部で大工。 |
| 23 | | ■ | ■ | ■ | | |
| 24 | | ■ | ■ | ■ | 親戚関係 (I市) | 出身一緒 海外で緑化の仕事。 |
| 25 | | ■ | ■ | ■ | | |
| 26 | | ■ | ■ | ■ | 親戚関係 (I市) | 出身一緒 地元=B市の人。入植時も当地区に居住はしていない。 |
| 26 | | ■ | ■ | ■ | | |

表の中の番号は、居住者の氏名の代わりにふった番号である。○印は、該当年に居住があったことを示す。

■の部分、その当時すでに離農他出または居住者の死亡により、居住がなかったことを示す。

※1 開拓農協組合員名簿は、組合設立時(1948年)の名簿である。

※2 「開拓の碑」は1972年に建立された。

※3 地区案内図には1990年現在という記載があり、その後居住者がなくなった家はペンキで塗りつぶされている(塗りつぶされている家の該当者を△で記した)

戦後開拓集落における共同性の現状

表3 A地区の農業経営の状況

| 年 | 総農家数 (世帯) | 経営耕地面積 (a) | 経営耕地面積(畑) (a) | 販売目的で作付け(栽培)した作物の 類別作付(栽培)面積 (1995年以前は作物種類別収穫面積) | |
|------|--------------|---------------|------------------|--|---------------------|
| | | | | 野菜類(a) | その他の作物 (苗木含む)(a) |
| 1970 | 18 | 3830 | 3130 | 470 | 2066 |
| 1975 | 16 | 3912 | 3400 | 640 | 2029 |
| 1980 | 14 | 2872 | 2481 | 430 | 2019 |
| 1985 | 13 | 2971 | 2779 | 554 | 2114 |
| 1990 | 13 | 3009 | 2837 | 1380 | 1550 |
| 1995 | 13 | 5937 | 5521 | 1091 | 3744 |
| 2000 | 10 | 2846 | 2631 | 156 | 340 |
| 2005 | 9 | 2093 | 1900 | 89 | X |
| 2010 | 8 | 2136 | 1953 | X | X |

2010年世界農林業センサスより筆者作成

表4 隣接地区(既存部落)の農業経営の状況

| 年 | 総農家数 (世帯) | 経営耕地面積 (a) | 経営耕地面積(畑) (a) | 販売目的で作付け(栽培)した作物の類別作 付(栽培)面積(1995年以前は作物種類別収 穫面積)野菜類(a) |
|------|--------------|---------------|------------------|--|
| 1970 | 12 | 1000 | 160 | 90 |
| 1975 | 12 | 969 | 225 | 142 |
| 1980 | 11 | 1055 | 261 | 131 |
| 1985 | 11 | 1160 | 171 | 99 |
| 1990 | 8 | 995 | 260 | 263 |
| 1995 | 7 | 874 | 196 | 0 |
| 2000 | 7 | 694 | 61 | 3 |
| 2005 | 7 | 939 | 222 | X |
| 2010 | 7 | 736 | 47 | X |

2010年世界農林業センサスより筆者作成

「大根も野菜だから時価だから、高いとは限らないのですよ。選果場もある、運賃もある、箱代もある、結構金額的には家で洗うほうが手元に入るお金は多い、ただ量ができんからね、選果場に出したら箱数ができるし。自分は大根つくって出すだけだから手間がね。」

さらに、出荷数を増やすために大根を1年に2回栽培するようになり、連作障害が出るようになったことで、1994年までには選果場は閉鎖された。

「だけどやっぱり2回植えるようになってから畑がダメ

になりましたね。だから畑の病気が出てね。3分の1植えて、3分の2は土地を休ませればいいんだけど。1年に1回ならいいけど、2回つくった。しっかり有機物入れればいいけど、ありゃ有機物入れてもダメじゃろ。みんな無理して。半分いけん大根。ごみの処分の方が金がかかる。」

「(もう辞めようとなったのは?) 病気がひどいから。商品にならんから。しっぽを切ったら中がまっ黒。捨てないといけない。選別する人もこれはいけんから言うて、ぜんぶほかして、それからもう辞めようということ

になって。』

4. 生活場面における共同の試み — A地区の各組織 —

大根選果場の試みは6年ほどで終了してしまいましたが、それは開拓農協解散以降に見られた農業面におけるほぼ唯一の共同の試みであった。は次に、農業以外の面における共同の試みにはどのようなものがあっただろうか。以下に見てみよう。

1) スキー組合

A地区に隣接した土地に、入植以前からAスキー場があった。岡山県で最初のスキー場と言う人もあり、モーターゼーション以前の時代に、最寄り駅で列車を降りて徒歩圏内のスキー場として人気があったという。

入植当初、開拓地で建設された家は「マッチ箱みたいな家ばかり」だったため、人々の集まる場所がなかった。A開拓では、スキー場に近い土地に「ヒュッテ」と呼ばれる建物(地元の人は「小屋みたいなもん」と記憶)を建て、総会をしたり、こどもの日に集ったりということを行うなど、スキー場はなじみ深いものであった。

Aスキー場がもっとも賑わったのは、「さんばち豪雪」の頃(1962年の年末から1963年2月頃)だったという。スキー客が最寄り駅から道につながるほど人が多かったと記憶されている。開拓地の中でもスキー場に近い家では、部屋を開けてスキー客を泊ませ、冬のよい現金収入としていた。

1965年に、このスキー場にリフトを設置するための助成金が出ることとなった。その受け手になるべく、開拓地の住民でスキー組合が結成された。リフトと言っても座るところもない、手で引っ張るような簡単なリフトだったが、乗り場近くに小屋を建ててそこで女性達が焼きそばを売ったり、男性がリフトの番をしたりということをした。スキー組合は主に、リフト券を売り、それを電気代や設備費にまわすといったリフトの管理を行っていたようである。

しかしモーターゼーションに応じて車で行くことができるスキー場に客が逃げ、また同じ町内に設備の充実したリフトを備えたスキー場が開業すると、Aスキー場への客足は途絶えた。スキー組合も次々に一抜け、二抜け、いつのまにか自然消滅みたいになってしまった。

2) 婦人会

A地区では、入植の初期、まだ生活が苦しい頃に婦人会が結成された。婦人会の仕事は、村単位で行われるこどもの学校行事や敬老会の運営であり、開拓の時代において、A地区と近隣部落の住民とが、生活面において唯一、行動を共にする組織であった。

営農確立以前の時期、開拓地の女性達にとって、婦人会への参加は非常に難儀なものであった。近隣の中心部落までの距離は約4キロあり、当然のことながら徒歩で往復した。敬老会があると言えば、夜になって近隣部落の女性達と踊りの練習が行われ、往復8キロの道のりを、小さな子どもを背負って歩き、泣いている子どもを傍に置いて踊りを練習して帰った。家で待つ夫は婦人会の活動に理解を示さず、そのこともまた、女性達にとっては大きなストレスであった。しかし女性達は、将来子ども達が近隣部落の人たちともなじんでこの土地で暮らしていけるようにするための義務だと思い、泣く泣く参加していたという。入植1世の妻であり、現在もA地区にひとり暮らし女性は、当時の婦人会活動を次のように振り返った。

「男が機嫌が悪いこと！でも子どもがこの土地の人になじんで、いいようになあいかにかあならんから、そりゃあ男が怒るのは一時じゃけえ、子どもが後あとみんなどつきあっていくのに、なあ、地元とこう、背中合わせのようになったらいけんけえ、学芸会じゃ、運動会じゃ、婦人会じゃ、男は子どもをひとつも見てくれんわな、小さい子だけびーびー、あのころは辛かったなあ。生活が苦しくてな、姑さんはおらんけえ、子どもは見てくれんし。じゃけえ、子どもを大きくするのに、ものすげえ難儀をしとる。(他の家の夫婦喧嘩に対して)一緒に詫びに行ったこともあった、婦人会の役員何をするかと怒られ、帰ってくればいつまでするか、ほんにえらかった。その時分、頭にきとったのは子どもじゃ思っとった。子どもがこの地元の人と仲良くして生活していけるようにしてやらにゃあ、今、開拓じゃけえいうて自由にしちゃいけん、あれがあって、怒られても婦人会はしとった。泣く泣くしとった。」

また、A地区内での婦人会の役割は、主に公共料金の徴収であった。当時は国民年金保険料や、電気料金を地区ごとに徴収して納付すると、手数料が支払われた。開拓が軌道にのってからは、その手数料を貯めたお金で、婦人会の旅行をしたこともあった。

「あの折にいちばんよかったのが、電灯料を順番に集めて歩きよった。その手数料があってな、それで旅行した。あの頃は手数料もようけくれよったけえな、国民年金のあれな、あれを婦人が受けてな、婦人会が使う。あの銭がなかったら動けんよ。」

3) 部落のまとまり

2013年現在、A部落で行っている共同作業は、秋祭りとして、年に1度7月に行われる草刈りの2つの行事のみで

ある。

草刈りに対しては、市から助成金が支給される。各家からできれば2人、少なくとも1人は出るようになってくるが、高齢女性の一人暮らしの家などは出ていない。出られない場合も、お金を支払う必要はない。また部落費（町内会費）を徴収することも、どこの家に対してもしていない。部落としての支出が必要な際は、草刈り作業で得た助成金をそちらにまわす。

以上のように、A 部落では、お金を出し合って何かを行うということはまったく行われていない。部落内に「老人いこいの家」という現在は公民館になっている建物があり、その利用権がA 部落の他に近接の2つの部落にある。1976年に「老人いこいの家」が建てられて以降、婦人会で冬のあいだに手芸や華道の活動をしたり、花見やバス旅行などが行われている。しかしそれらはA 地区が所属する合併前の旧S 町が公民館単位で活動の助成金を支給していた時期に限られており、助成金が打ち切りになってからは「お金が出なくなったから」という理由で行われなくなった。

現在、A 地区の寄合は、年に一度、祭りとお草刈りの日程確認、および地区長改選（任期2年）を行なうために集まる総会のみである。地区長は引き受けられる世代の者がいる家が、順番で引き受ける。総会の後はお弁当をみんなで食べるくらいで、「お金のどころがないから」と、以前のように飲み食いまではしない。

（開拓の人どうしのまとまりは？）「わし（＝地区外の、地元の人）が見る限りあんまりないな。今頃はない。昔おやじの頃はな、大根をつくりよる頃はな、毎月その「いこいの家」に寄って飲んだりしよったけどな、だいたい毎月。入植1世の人たちの頃。大根の産地だったんよ。夏から秋に出荷する大根でな、結構いい品種だった。産地になってな、みんなで共同の選果場したりして、自然に、品物を揃えるための話とか、消毒とか栽培技術とかいろんな話をするコミュニケーションの場があったんだけど、大根を作らなくなってから、わしが見る限り、なんかもう若い人たちが寄ってなんかするということは、ほとんどないみたいだ。」

4) 祭り

秋祭りは毎年、11月23日（祝）に行われている。最初は11月9日だったのが、苗木栽培が忙しい時期だということで11月25日に変更になり、その後、平日よりも祝日の方がよいということで再変更となった。

祭りを仕切るのは当家（とうや）であり、毎年、「開拓の碑」の裏に書いてある順番で、持ち回りで務める。当家の仕事は、太夫さんと呼んでくること、お供え物（餅・魚・野菜・玄米・白米・お神酒）の用意、湯茶や座布団の準備

である。祭りの内容は、収穫を祝うもので、開拓に関する要素は「全然ない」とのことである。

地区内にこどもが多かった頃は、こども相撲をとるなどして盛り上がった。当家が2升分の米をお握りにして用意し、親類縁者も参加して賑わった。だが現在、当地区にはこどもが4人いるのみで、お神輿が出ることもなくなり、入植第1世代の女性は「祭りだ言えば祭り、祭りじゃねえー言えば祭りじゃねえ。」と謙遜する。

しかしA 地区の人々は開拓神社を大切に維持してきた。それを示すのが、1980年代後半に社殿を改築したこと、それに伴い、境内へ続く道を、自動車も通ることができる広いものを新たに造設したことである。それまで神社へ続く道は、「けものみち」と称される「こけたら怖いような」狭い一本道で、自動車で登ることもできなかった。土地は神社に近接したところを地区のある家が提供し、道をつけた。また社殿の改築も、地区住民が杉や檜を提供し、寄付も出し合って行った。

「私なんか思うのは、あの開拓神社があるけえ、神様が守ってくれる土地におるんじゃけえ、ありがたいいう気持ちをもってみんな祀りよったんじゃ。」

5. 「地のひと」との関係

A 地区の人々は、入植以前から当地区の近隣に居住していた地元の人々のことを「地のひと」と呼ぶ。

入植当初、田畑を持ち、電気の通った家で暮らしていた近隣部落の人々からは、開拓者たちにたいして厳しい視線が注がれていた。入植第一世代の妻は、開拓でいちばん苦労した思い出として、当時の新郷村の村長に「開拓の人間は、牛の骨か馬の骨かわからない」と言われたことを繰り返し挙げた。そしてその場で次のように言い返したら、他の入植者達に褒められたのだそうだ。

「人間じゃけえ、牛の骨でも馬でもねえ」言うたら、みんなが「いいこと言うたなあ」とな。」

他にも、陸稲を育てれば「地から穂先まで穂だらけじゃが」と言って「地のひと」が通っていくのが悔しかったという声もあった。土地条件の悪い土地で陸稲を育てても、茎が伸びず、土から直接穂が顔を出しているような実りの悪さに対する揶揄であった。

それでも、周りの人は親切だったと感謝の意も聞かれた。

「地元の方は、攻撃は時にはあるよ、土地を買収しとるわけじゃけえ。じゃけど楽な人がここに入ったんじゃねえけえ、情はあったな。買収かわいそうといっても、

でも満州の人は裸一貫。そのこと思えば内地の人は痛みが少なかったろう。それをいっぺん話したことがある。情けないじゃろうけどお互い助け合っていていかせてちょうだい、いうことでな。まあお互いがこどもを育てていけるような人間にしてやりたいという気持ちがあったけえ、……国のために尽くして戻ったもんがここに入ったんじゃけえ。」

A 地区の人々が入植した頃に、当時中学生だった近隣集落に住まう M 氏によれば、入植者の中には M 氏の家に毎晩のように風呂に入りに来て、囲炉裏で暖を取って帰っていった者もいた。M 氏の祖父母は入植者の人々に様々な世話をしており、冬には爪草鞋（つまごわらじ）を作って履かせたり、貯蔵してあったサツマイモを分け与えたりということをしてきた。また入植者の中には、近隣部落の祭りになるとやってきて、お酒を飲むのを楽しみにしている者もいたという。M 氏の家には 2012 年に、すでに他出した入植者が世話になったと挨拶に来た。また開拓の碑の除幕式に呼ばれたり、A 地区の若者（入植第 3 世代）の結婚式に参加したりというつき合いが、今でもある。

他方、A 開拓が営農を確立し、苗木や大根の産地として軌道に乗ってからは、A 地区は逆に、近隣集落の人々にとって、雇用の場となった。農繁期の仕事は多く、地区の人々は人を探して来てもらわなければならないほどであった。

6. 結論

以上、戦後開拓で拓かれた集落である A 地区の共同性の現状についてみてきたが、これを冒頭に述べた柔軟性と重層性という観点から考察してみたい。

重層性という点でみると、A 地区には大根の共同選果の試みといった農業を基盤とした共同性の強化だけでなく、スキー組合の設立や、婦人部の活動など、生活場面で展開する組織が、数は多いとは言えないが、活発に活動を展開した時期が見られた。

しかしながらこれらの組織のほとんどが、現在では消滅しているか、実質的な活動をほとんど行っていない。その理由として、これまでの検討から考察されるのは次の 2 点である。

第一に、A 地区の地区運営における平等性の功罪である。通常府県農村では、集落の意思決定に誰が加わるのか、すなわち生活基盤としての農業の比重が下がる中で、農業者（生産者）が意志決定の中心であったのが、離農した非農業者（生活者）もそこに加わることを認めるか否か、等については集落のあり方をめぐる大きな問題となる。また部落費徴収のあり方等についても、何を維持するため

に、いくら必要で、誰がどう払うのか（例えば高齢独居の世帯にも課すか否かなど）、といったことの検討は、集落内の構成変化を意識し、その存続のための合意を得るきっかけとなる。しかしながら当地区では、こうした契機を意識しなくて済むようになっていく。地区長、婦人会の地区代表、祭りの当家はいずれも持ち回りで決定されてきたが、これは開拓農協時代に組合長をこのような方法で選んでいた頃からの継続である。地区に先祖代々の中心的な存在を担う者がおらず、順番でまとめ役を担ってきた。また、地区で何かを執り行うといった場合に、その都度各家がお金を出し合うという経験がほとんど見られず、開拓農協解散以降、地区で積み立てられてきたお金を、草刈りの助成金などで補完しつつ、必要な時に支出することで成り立ってきた。そのため、地区世帯数の増減や、高齢世帯の増加などに伴って、部落費の徴収が問題になるようなことはなく、高齢世帯で草刈りに参加できなくなった負い目を感じる必要が生じない。他方で、地区の構成員を可視化させる契機もないことから、地区運営が困難になったことが自覚されることもないのである。生活に必要なことプラスアルファの内容をもつ地区の活動を継続していく上で、問題として認識されることがあるとすれば、それまで出ていた助成金が出なくなった時であり、個人が負担してまで継続していこうという動きはこれまでもほとんど見られなかった。すなわち、当地区の地区運営における平等性は、様々な重層的な組織の継続よりも、活動停止に向けた柔軟性として機能してしまっているようにみえる。

第二に、開拓地であるからこそその世代の画一性の功罪である。これまで見てきたように、婦人会の活動の強烈な動機となっていたのが、こどもが地元になじめるようにするためというものだったが、開墾が困難な中で婦人会の活動に泣く泣く参加していた女性達は、ほとんど全員が子育て世代の 20 代から 30 代前半の年齢層であり、こどものためという動機はほぼ全員に共有されていたことになる。また、大根部会が結成され、共同選果に踏み切った 1980 年代後半は、入植第一世代と第二世代のちょうど世代交代に当たる頃であり、大根のブランド化を目指して勢いを高めた要因となったであろう。しかしその後、入植第三世代が一斉に他出していく時期を迎えると、様々な組織を再編成させようという動きは見られなくなっていく。すなわち、世代の画一性という点でみると、当地区は柔軟性を欠いていたと言える。

その一方で A 地区の若い世代は、地区の共同性というところを飛び越えて生活をしているように見える。現在当地区に入植第 3 世代が居住しているのは 2 世帯（表 2 の番号 1 と番号 8。いずれも 30 代。）であるが、ふたりとも近接地区の若連および消防団に加入し、イベントのたびに出かけて行って活動をしている。そしてそのうちの 1

名は、高校卒業後に1年間、他出していたこともあり、「20代の頃から遊ぶといったら県南（著者注：岡山県内の都市部）の方で、友達もみんなあっち」と言い、A地区が開拓の部落だなと思うことは「ないですね」とのことである。

地区を超えた関係の結びつきは若い世代ばかりでない。入植第1世代の女性は現在一人暮らしをしており、地区内の同じ入植第1世代の女性や、隣の家的女性（入植第2世代の妻）と懇意にしているが、それに加えて最近、郵便局長が気にかけてくれることを喜んでいる。郵便配達の折に局長が声をかけたり、夜間でも何かあった時には気軽に声をかけてよいと言われることが大きな安心感となっている。

こうした点を踏まえてみれば、A地区の共同性の今後の展開は、地区の範囲を超えた広い視点でみていく必要があるだろう。

以上

謝辞

本研究は、平成22-24年度日本学術振興会科学研究費補助金(若手研究B)研究課題「戦後開拓集落の現状に関する歴史的・実証的研究」(課題番号22730426, 研究代表者)、および平成22-24年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究B)研究課題「環瀬戸内圏農林漁業地域における女性・若者・高齢者の生活原理に関する総合的研究」(課題番号22310163, 藤井和佐研究代表、連携研究者)の支援を受けた。

また本研究の調査にご協力いただいたA地区在住の方々、元A地区住民の方々、および近隣集落の住民の方々に感謝申し上げます。

文献

- 蘭信三：満州開拓団を母体とする戦後開拓集落における「共同性」－熊本県東陽開拓農協の事例－。ソシオロジ, 33(1), 1988.
- 大竹晴佳：野原地区における開拓の展開－戦後開拓の30年とその後をめぐるとの考察－。新見公立短期大学紀要, 29(2), pp.99-107, 2009.
- 岡山県戦後開拓史編纂委員会編：岡山県戦後開拓史。岡山県開拓協会, 1983.
- 越智正樹：八重山戦後開拓集落と母村との間の親族間交流の変容。京都大学グローバルCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」ワーキングペーパー, 2010.
- S町史編纂委員会：S町史。S町, 1971.
- 戦後開拓史編纂委員会編：戦後開拓史－完結編－。全国開拓農業協同組合連合会, 1977.
- 田中重好：共同性の地域社会学－祭り・雪処理・交通・災害－。ハーベスト社, 2007.
- 鳥越皓之：家と村の社会学(増補版)。世界思想社, 1993.
- 永野由紀子：現代の東北農村のムラにおける共同性：山形県庄内地方宝谷の事例。東北学院大学経済学論集, 177, pp.291-311, 2011.
- 日本村落研究学会編21世紀村落研究の視点－村研50周年記念号－(年報村落社会研究39)。農山漁村文化協会, 2004.
- 橋本五策：A開拓三十年の歩み。自家製本, 1999.
- 橋本五策：詩歌集。自家製本, 2000.
- 林研三：日本農村における共同性－伝統的地域組織を中心にして－。法社会学, 59, pp.90-106, 2003.